

—ええ、彼は私に言うました、彼等は話をする時間が取れなかったと、何故なら、侯爵がベナルマデナのトッレケブラダにゴルフに行かなければならなかった、然し侯爵は新しいインタビューを許さなかったのです、何故ならヘススを怒っていたのです。

見たところ、ヘススは彼（侯爵）に言ったのです、私は知っている、貴方はスペインに税金を払っていない、払っても少しだけだ、何故なら貴方のお金はスイスの銀行にあると。

—外国為替で逃避？

—そう、侯爵は確かにすごく怒っていましたが、彼（侯爵）はヘススに言いました。私は耐えられない、この種の君の断言・言明は無い、新聞記者が口を出すなんて有り得ない、彼らと呼ばない・・・。

—変だわね！

ローラ セプルベダはかなり攻撃的に私に話した、ヘススは彼女にどんな生活をしているかと質問したと・・・。

私は思うよ、スシ、私達はもうヘススの殺人、薄暗いお金の絡んだ事件について手がかりをつかんだ、（解決）も半ばまで行っている。

クラウディオ エルミタスの新しい歌が聞こえて来た、そして彼は別荘から出てくる。白い衣服、いつも人工の太陽によって黒く焼いている、冬はマイアミ、夏はコスタ デル ソルと。招待客の全てが彼の近くに寄った。曲が変わった。有名な“誕生日おめでとう”の旋律に合せた音楽が始まった。一人の殆どヌードのブラジルの女性が大きなケーキを持って歌手に近づいた、ケーキには大きなローソクが一本だけあった、スシは“彼の年齢は不明”と考えた。招待客の全てが歌を歌った、クラウディオは微笑みそしてローソクを消した。カメラマン達。もう一度。微笑みローソクを消した。多くの写真撮影。拍手。新しい歌、人々は新たに踊りだし、酒を飲んだ。ペペは人目を引いているソフィアに近づいた。

—踊りますか？

—勿論、彼女は答え、ペペの腕を強く握った、ペペは自身が背が低いく滑稽に感じた、ソフィアの胸のあたりの高さだった。